

## 「保育内容・言葉Ⅰ」における絵本読み聞かせの実践

田中 麻紀子

TANAKA Makiko

保育の現場では毎日のように絵本の読み聞かせを行っている。学生が実習に行った際も、初めの部分実習として絵本の読み聞かせをすることは多い。本稿では、「保育内容・言葉Ⅰ」の授業内で行った絵本読み聞かせの実践を通して、学生がどのようなことを感じ、今後に繋いでいくかを考察する。その上で授業内でどのようなことを指導することにより、学生が保育実践に活かせることができるのかを考え、今後の授業改善に役立てられるようにする。今回の調査内容から「絵本の読み聞かせについてもっと教えてほしいことや学んでおきたいこと」について、「絵本の読み聞かせにあたり導入の仕方や読み聞かせの終わり方」「子どもたちを引き込む方法」「絵本を選ぶポイント」などの回答があった。今後の「保育内容・言葉Ⅰ」の授業では、絵本の読み聞かせだけに重点を置くのではなく、導入やまとめについての指導も含めた授業内容に取り組んでいきたい。

キーワード：絵本、読み聞かせ、保育、言葉

### 1. はじめに

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の中の「言葉による伝え合い」には、『保育士や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる』と記されている。また、「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」領域「言葉」の1歳以上3歳未満児の保育の中で、『④絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣したりして遊ぶ』、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」3歳以上の保育では、『⑨絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう』とある。

保育の中での絵本について、伊勢ら(2017)は、『幼児は、絵本の世界での体験を自分の実体験と照合し再認識したり、未知の体験を絵本の世界で体験したりすることで自らの想像力を豊かにしていく。幼児の知的・情緒的発達にとって、絵本の読み聞かせは大変重要な活動なの

である。』<sup>1</sup>としている。子どもは家庭でも絵本を読んでもらうことがあるが、保育の場、集団の中で読んでもらうことによって友達と同じ世界を共有することができる。

さらに小川(2010)は、『保育の場においては、保育者と子どもが対面で読む場合もあるだろうが、多くの場合、子どもは集団で絵本を聞く。聞き手である子ども同士が、絵本を聞く場を共有し、ともに味わう体験をするのである。子どもは保育者の読む絵本の世界に友だちといっしょに出会い、味わう。絵本の世界を共有する。このことが保育の場で絵本を読むことの重要な意味となっている。』<sup>2</sup>と述べている。このように子どもは、一冊の絵本を通して、同じ世界に入り込み、様々なことを感じ、考えるのである。

絵本の読み聞かせから絵本の世界を共有することを子どもに経験させるためには、題材となる絵本だけでなく、読み手である保育者の存在も重要である。保育者がただ楽しい読み方で読んでいては子どもが絵本に集中することはできないし、また過剰な演出をし過ぎても、物語に入り込むことはできないであろう。ではどのように読むのが良いのか。

東京子ども図書館編集の『TCLブックレットよみきかせのきほん—保育園・幼稚園・学校での実践ガイド』

(2018)の中で読み方の3つ目として『会話の部分で声色を変えるなど、演じて読むことはありません。絵本全体の流れを捉えて読んでいくと、緩急が自然につき、それが子どもたちがお話の世界に入る助けになります。』<sup>3</sup>と記述されている。このように詰まったり、間違ったりせずに読むことは基本であるが、演出しようとするあまり、過剰な声色になるとそちらに子どもの意識が行ってしまい絵本のストーリーに集中できなくなる。そうかと言って、淡々と読みすぎると楽しい話も味気の無いものになってしまう。読み方の緩急が自然につけられるようにするためにも、読み手はしっかりと絵本を読み込む。

小川(2010)はこのようにも述べている。『絵本の読み聞かせは単に文章や絵を楽しむだけでなく、絵本の世界を読み手である保育者と利き手である子どもたちが共有し、そこに生まれてくるものを享受していることを忘れてはならない。』<sup>4</sup>保育と同じで、読んでいる本人が楽しんでいなければ子どもたちに楽しさが伝わることはない。読み手自身も絵本を楽しむ必要がある。

筆者の担当する「保育内容・言葉Ⅰ」の授業で、絵本の読み聞かせの実践を行っている。1回生後期の授業での取り組みである。読み聞かせの実践までに絵本の基礎知識について学び、その後図書館で様々な絵本を手にとることのできる授業内容にしている。

1回生の後期授業終了後の2月に設定されている保育実習に向けて絵本の読み聞かせを実践することで、学生が実習の際絵本を読むという課題に少しは余裕を持って取り組めるのではないかと考えた。子どもの前で読むのと、学生同士で読むのでは大きな違いがあるのは当然であるが、人前で読み聞かせを行うことで、相手に伝わるように読むためには、どのようなことに気をつけなければならないかを考えさせる意図もある。

今回授業内で絵本の読み聞かせを行った学生に、実際に行ってみてどのように感じたか等、読み聞かせ終了後に記述を行った。すでに子どもの前で読み聞かせを行ったことがあるという学生もいたが、全く初めてであるという学生もいた。それぞれに感じたことを基に今後の授業に繋いでいけるよう考える。

## 2. 方法

### (1) 調査方法

調査期間 2021年12月3日～2022年1月31日

調査対象 短期大学こども学科1回生

「保育内容・言葉Ⅰ」の受講者のうち研究

に協力すると回答した者140名

調査内容 授業内で以下の課題を出す。

- ・絵本読み聞かせの計画書を作成する。
- ・絵本読み聞かせの実践を行う。
- ・絵本読み聞かせの実践後、「振り返り」を記述する。

### (2) 振り返りの内容

1. あなたの読んだ絵本の題名を書いてください。
2. なぜこの絵本をえらんだのかの理由をできるだけ詳しく書いてください。
3. 実際に読み聞かせを行ってみて、上手くできたところはどんなところですか。
4. 上手くいかなかったところはどんなところですか。
5. 練習時間はどれくらいですか。また何回くらい読みましたか。
6. もっとこうすれば良かったと思うところはどんなことですか。
7. 子どもの前で読むためには、どのようなことに気を付けようと思いますか。
8. 次はどんな本に挑戦したいですか。(ジャンルでも題名でも構いません)
9. これまで子どもの前で読み聞かせを行ったことはありますか。(・ある・ない)
10. 問9で「ある」と答えた方、いつ頃、どのような場所での読み聞かせでしたか。
11. 問9で「ある」と答えた方、子どもの反応はどうでしたか。
12. 絵本の読み聞かせについてもっと教えてほしいことや学んでおきたいことがあれば書いてください。

### (3) 読み聞かせの実施方法

絵本読み聞かせにおける実践には、以下の条件を出した。

①持ち時間を一人8分間とする。

導入、絵本の読み聞かせ、まとめを行う時間を一人8分間とした。課題とした絵本の長さを考え8分間とした。

②絵本のジャンルは、物語絵本とする。

「読み聞かせ」ということに重点を置いたので、短い赤ちゃん絵本ではなくできるだけ読む箇所が多い物語絵本という条件にした。

③絵本を読み始める前に導入としての手遊びや絵本の登場人物などに関連したクイズなどを行うこと。

これは絵本をいきなり読むのではなく、語り掛けをどのようにするか、また読み聞かせの環境づくりをするための手遊びや絵本への興味を深めるために何をすればよいかを考えるために課した条件である。絵本を読む前に必ず手遊びをしなければならないと考える必要はないが、今回は学生の経験のために、手遊びなどを行うことも課題とした。

④子どもに読むつもりで行うこと。

学生同士ではどうしても照れや恥ずかしさがある学生もいるが、子どもに対して行うつもりで取り組むことでシュミレーションしやすくなると考えた。また聞いている側も子どものつもりで聞くようにした。そうすることで絵本読み聞かせの前の語り掛けも、子どもに対して話をするようにできると考えた。

#### (4) 倫理的配慮

研究への協力は自由であること、協力しなくても不利益にはならないこと、エピソードを使用する際の園名、個人名は匿名とすること、また研究の成果は今後の授業の充実を図るために使用する旨を書面及び口頭で伝えた。なお研究実施については、本学研究委員会にて承認を得た。「振り返り」の使用、記載については「研究に協力する」とチェックしていた140名を対象とする。

### 3. 結果と考察

調査内容の各項目についての回答を基に検討していく。

(1) 調査内容1・2『あなたの読んだ絵本の題名を書いてください』『なぜこの本を選んだのか理由をできるだけ詳しく書いてください』の結果については、以下があがった。

①読み聞かせをする季節にちなんでいるから。

②自分の経験と重なるものであるから。

③子どもに知ってほしいと思う内容であるから。

絵本の読み聞かせの実践が始まったのが12月の3週目からであったので、自分の順番を考えてクリスマス・正月・冬をテーマにした絵本を選択した学生も多かった。子どもに読み聞かせをする際にも、季節感を大切にした上で絵本を選ぶことも多々ある。

代田(2001)は、著書中の「読み聞かせ会での本選び(3)季節や行事に合った本を」の項目に「暑さでうだる教室で「寒い寒い冬の朝……」という本を読む人はまずいないでしょう。絵本には、季節を問わずに楽しめるものも多いですが、「今の時期にこそ読み聞かせたい」とい

う旬の絵本を選ぶように心がけると、子どもたちもぐんと集中してくれます。』<sup>5</sup>と述べている。

このように季節に合った絵本、まさにその時期だけの絵本というのは子どもにとって興味や関心を持つことのできる要因の一つであると言える。

また、物語絵本は数多く存在している。その中で自分の経験と似たような話がいくつもあるだろう。自分の経験と同じようなストーリーであれば思い入れも強くなる。

小川(2010)は、著書中の「絵本を選ぶ」という項目の中で、絵本を選ぶ際にどのようなことに注意すればよいかを『まず、よくいわれることであるが、読み手である保育者自身が楽しんだり、共感したりできる絵本を選ぶことである。読み手で自身が楽しみながら読むことで、絵本の世界はよりいきいき子どもに伝わるであろう。』<sup>6</sup>と述べている。自分の経験に近いストーリーであれば、共感できるし、ぜひ子どもにも知ってもらいたいと思うであろう。それによって、絵本のストーリーが子どもに伝わりやすく心に残ることと考える。

東京子ども図書館(2018)の『よみかかせのきほん』中の「読み聞かせのための基本ガイド」には、『楽しさを伝えることが読書への橋渡しになります。読み聞かせでは、子どもは文字を読む負担なしに、ただただ心を躍らせて本の世界に聞き入ることができます。楽しければ、読んでもらった本を手取るなど、本とのつきあいにつながります。私たちは、それぞれの年齢に応じて、子どもが喜びや驚き、共感で満たされる本を読むことに心を砕くだけでよいのです。子どもたちより少し経験のある読書人として、私たちが伝えることができるのは、本の楽しさです。』とある。小さい頃の絵本を選んだ学生の中には、読んでもらった時の記憶が鮮明に残っており、子どもたちにも自分のように感じてもらいたいと選んだことが記述を見るとわかる。

保育者は子どもに絵本を選ぶとき、読んでもらっている時間を楽しむことも大切である。また本を読むことの楽しさを伝えられるような本を選ぶことも重要なことである。

以下に学生の記述を示す。

『ポカポカホテル』

冬にぴったりの絵本だと思ってこの本を選びました。話が進んでいくにつれて、たっちゃんが温かい気持ちになっていくのを見ていると、聞いている人まで温かい気持ちになれると思いました。

『くまじいちゃんのクリスマス』

クリスマスの時期でクリスマス関連の絵本を読みたくて選びました。また、少し面白いシーンがあるので子どもも興味を持ってくれるかなと思い選びました。

『サンタクロースのおばあさん』

クリスマスに近いから。イベントの楽しさを覚えてくれると思ったから。

『十二支のはじまり』

読む順番が年明けの一番だったので、お正月の絵本を読みたいと思ったのでこの絵本を選びました。この絵本は私が小さい頃よく読んでもらっていたので、クラスの人みんなに紹介したいと思い選びました。

『ずーっとずっとだいすきだよ』

自身の飼い猫が余命宣告され、離れて住んでいるのもっと気持ちを伝えたい、伝えればよかったと考えているため。心の中で思っただけでも言葉で伝えないと相手に伝わらないということと、自分の気持ちを伝えて良いということを知ってほしいので。

『ちょっとだけ』

絵本の主人公が長女で、私も長女ということがあり、共感できるポイントがたくさんあったから。

『こんとあき』

小さい頃によく読んでもらっていたり、自分で読めるようになってからもたくさん読んだりした絵本。どれにしようかと悩んでいた時に見つけてとても懐かしさを感じ、読み聞かせをしたいと思った。

『まあちゃんのながいかみ』

子どもの頃から大好きな絵本だったから。ファンタジーでも実現できそうで楽しいと思った。ワクワクを子どもたちに届けたかった。

『100万回生きたねこ』

小さい頃からずっと好きな絵本で、みんなにも知ってほしいと思ったから。自分でも何度も読んだり、妹にも読んであげたりして読み慣れた絵本だったので、落ち着いて読みことができると思った。

『バムとケロのにちようび』

私が小さい頃に読んでもらって楽しかったし、絵が細かいところまで描かれていてその絵を見るのも面白かったからです。

『へっこきよめどん』

私は昔話が大好きです。特にこの話は自分が幼い頃に読んでもらってすごく面白かった記憶があったので、みんなにもこの面白い絵本を知ってほしいと思い選びました。

『きりかぶのともだち』

昔から家にあって思い入れのある絵本だったからです。幼い頃は“友だち”“けんか”のようなことしか考えていなかったのですが、高校生の頃に読み返したとき、普段から一緒に話ができる友だちがそばにいることが幸せなことだと分かることができる絵本だと感じました。私にとって大切な絵本だったので選びました。

『おまえうまそうだな』

小学生の時に担任の先生に読んでもらって、感動しても印象に残っているから。

『納豆侍 まめ太郎でござる』

私は小さいころ、納豆が苦手でした。そんな私に母が「納豆にはこんなすごい力があるんだよ」とこの本を買ってきてくれました。この本を読んで、私は一生懸命納豆を食べて克服することができました。今、朝ごはんをしっかりと食べない子どもや好き嫌いの多い子どもが増えているので、この本を読んで納豆のすごさを知ってほしいと思いました。

『ずっとそばに…』

子どもにはかわいくて、楽しくてワクワクするようなものやファンタジーも必要だと思います。しかし自分も子どもの頃に読んでもらった「泣いた赤鬼」「ごんぎつね」「葉っぱのフレディ」のような悲しくも心揺さぶられるお話は今も心にしっかりと刻まれています。子ども（特に都会に住む子）にとって、山の動物は身近な存在ではないからこそ、絵本を通して知ってほしいと思い選びました。

(2) 調査内容3『実際に読み聞かせを行ってみて、上手くできたところはどんなところですか』の結果につ

いては、以下があがった。

- ①抑揚をつけて読むことができたこと。
- ②自分のペースで読むことができたこと。
- ③声の大きさ・読むスピードが上手くできたこと。

学生は緊張した状態で絵本を読んだが、その中で練習通りに、また本番では練習の時以上の成果が見られた学生もいた。何度も読んで練習を重ねることで、緊張してもしっかりと読むことができたことが示された。

以下に学生の記述を示す。

・登場人物が多かったので、今誰が話をしているのかが分かりやすいように声に抑揚をつけたり、声の高さを変えたりして聞きやすいように工夫しながら読めた。

・練習の時は少し詰まったり噛んだりしてしまったけれど、本番では一度も噛まずにスムーズに読むことができた。

・読むときに抑揚をつけたり、絵本の主人公「オットさん」に語りかけたりするように読むことができた。自分が絵本のストーリーに入り込み、感情を聞き手に伝えることができた。

・読むスピードに気を配れた。

・とても緊張したが、自分の思うとおりに進行できた。みんなの前だと読むスピードが速くならないか心配だったが、練習通りゆっくり丁寧に読むことができた。

・時間はすごくオーバーしてしまったけれど、焦ることなく自分のペースで読み聞かせを行うことができた。

・少女のセリフの切なさを上手く表現できたと思う。手遊びの雪のこぼれと絵本の内容が関連していて、綺麗な流れになったと思う。

・絵本を読む前は緊張していたのに比べ、読み始めると落ち着いて文章の間や声の大きさに気を付けて読むことができたと思いました。速さも丁度良いスピードで読むことが出来たと思います。絵本の向きも見やすかったと言ってもらえたので良かったです。

### (3) 調査内容4 『上手くいかなかったところはどん

なところですか』の結果については、以下があがった。

- ①ページのめくり方が上手くいかなかったところ。
- ②緊張してスピードが早くなってしまうところ。
- ③緊張してセリフがとんだところ。

緊張すると思うように手が動かなくなってしまい、ページをめくるのに苦勞した学生が多かった。前に出て読み始めた時に明らかに手が震えている学生もいた。練習とは違い、人前では緊張を伴う。

「大人の前だから緊張するけれど、子どもの前なら大丈夫だと思う」と言う学生もいるが、決してそのようなことはない。学生にもいつも「実習で子どもたちの前で保育をするとき、クラス子どもたちだけではなく必ず担任の先生方も見ておられる。また子どもたちは率直だから、つまらないときはつまらないということが態度や表情に表れることもある。それを見て、余計に緊張が増したり、焦ったりすることもある。子どもたちは学生同士のように、保育者役（実習生）が困らないよう察知して先に動いたり、先回りの理解をして動いたりすることは少ない。ただ、子どもが実習生に合わせてくれることもある。人前に出て何かをしたり話しをしたりするのは慣れであるので、授業内で人前に出る機会をたくさん作るので慣れていってほしい」と話している。

実践を何度も繰り返し行うことで、少しずつでも自分に足りないところや改善すべきところが見えてくる。それを見直しながらまた練習することで、余裕を持って楽しみながら読み聞かせをすることができるようになる。

以下に学生の記述を示す。

・ページをめくるときに絵本の持ち方が悪く、2枚一緒にめくってしまったたり、手遊びの時少し早口で話してしまったりして上手な説明が出来なかったところです。緊張して手が震えてしまって、絵本も少し動いてしまいました。

・絵本をめくるのが上手くいなくて1ページ飛ばしてしまい、戻ることになってしまった。  
・早口だった上に、何回か噛んでしまったのでゆっくり読むべきだと思いました。

・緊張して読むスピードが速くなってしまったところ。

・読み方に注意していたので、声が小さくみんなに聞こえにくかったことです。

・緊張してセリフが飛んだこと。子ども相手に砕けた話し口調になってしまったこと。

(4) 調査内容5『練習時間はどれくらいですか。また何回くらい読みましたか』の結果については、以下があがった。

練習時間、回数については学生によって様々である。多い学生で「10回以上」少ない学生では「3回くらい」という回答があった。

実際子どもの前で読むにあたりどのくらい練習をすれば良いか個々の状況にもよる。しかし、少なくとも詰まったり、読み間違ったりすることの無いようにはしなければならない。

練習の方法としては、児玉(2016)が著書『よくわかる!絵本の選び方・読み方 0～5歳子どもを育てる「読み聞かせ」実践ガイド』で『1, 鏡に映してみる、声を出して読む。読み聞かせは、子どもたちにどう見えているか、どう聞こえているかを確認しながら練習するのが上達の近道。～中略～2, 録音して自分の読み方を確かめる。自分ではなかなか気づけないことに「読み癖」があります。無意識のうちに「えーっと」「あの…」などと口にしていませんか。声に出して読む練習をする際、同時にレコーダーなどに録音をしてみましょう。自分の耳で聞きにくい部分を自覚すると、効率よく練習できます。3, 読み聞かせにかかる時間を確認。時間が足りず早口に…では、子どもたちに物足りなさや不満感が残ります。～以下略』<sup>8</sup>と述べている。

このようにある程度読む練習が出来たら、客観的に自分を見るのが効果的である。自分では出来ているつもりでも、人から見るとまだまだ足りないことも、客観視する事で気づけることも増える。それにより子どもの前で読んだ時も、子どもたちが聞きやすい読み聞かせに繋がる。

以下に学生の記述を示す。

・10回以上は読んだ。1日2回通すようにしていた。

・1日2回流れを読む練習を1週間続けました。

・家族相手に10回以上、友だちに3回読みました。自分一人ではその倍読んでいます。時間はわかりません。

・1週間前から1～2日に1回のペースで、音声を録音しながら練習しました。

・数えてはいないけれど、寝る前に読んだ。10回以上は練習したと思う。

・3回くらい読んだ。

(5) 調査内容6『もっとこうすれば良かったと思うところはどんなことですか』の結果については、以下があがった。

- ①絵本の持ち方やめくり方。
- ②ゆっくりと読むこと。
- ③途中で全体を見渡し子どもを見ること。
- ④絵本の読み聞かせの終わらせ方

実際に人前で読んでみて初めて気づくことも多かったようである。自分が想像したり、考えていたりしたこと以上に難しかったこともあるであろう。しかしいくら事前に指導していても、学生本人がやってみないことには、実感として伝わらないことも多々ある。自分で行なってみることで、他者から言われるよりも様々なことを考えるきっかけになる。

以下に学生の記述を示す。

・めくるのが上手いかなかったのでめくる練習や持ち方の練習をもう少しするべきだった。

・絵がしっかりと見えるように持ち方をもう少し工夫すれば良かったかなと思った。

・もう少しゆっくり読めばよかった。

・読むだけでなく動画を撮ったり、鏡の前で練習したりして絵本の角度を確認すれば良かったと思う。絵本を縦にする場面の時、めくりながらスムーズになるようにしたかった。

・絵本を読んでいる途中で、何度か子どもたちの方を見たり、みんなの様子を確認したりできる余裕がもっとあればよかったと思った。

・終わらせ方をもう少し工夫出来れば良かったと思った。

・最後時間が余ってしまって、アドリブの話して繋いだところを前もって何を話すのか準備するべきだと思いま

した。現場に出ても同じ場面になり、アドリブを思いつかなかつたら沈黙の時間ができてしまうし、子どもたちの集中も切れてしまい、最後まで話しを聞いてくれないかもしれないので、前もってしっかり話すことの準備や話しの整理をすれば良かったと思いました。

(6) 調査内容7『子どもの前で読むためには、どのようなことに気を付けようと思いますか』の結果については、以下があがった

- ①緊張せずに落ち着くこと。
- ②全体に絵本が見えているようにすること。
- ③ゆっくりと大きな声で丁寧に読むこと。
- ④子どもに適した話し方すること。
- ⑤楽しいと思ってもらえるように読むこと。

普段一緒に生活しているクラスの友人の前であっても、多くの学生は緊張しながらの読み聞かせとなった。緊張することは悪いことではないが、余裕がなくなると咄嗟の判断や対応が出来なくなることも多い。また、緊張は子どもたちに伝わる。筆者も保育の様々な場面で、自分の緊張が子どもに伝わってしまった経験がある。ほどよい緊張感を保ちながら、見ている側にはそれが過度に伝わらないようにできると集中できる環境になると考える。

また、今回は学生同士であったが、読み聞かせの実践を行った学生たちはそう遠くない先に実習が待っている。初めての保育実習であるので、その実習で絵本を読む機会を与えていただける学生もいるはずである。そこで、子どもの前での読み聞かせを想定して、今回の課題に取り組むよう学生に伝えている。子どもたちには自分が読む絵本を楽しんでほしいと考えるのは当然のことである。「楽しんでほしい」「楽しませたい」と考えながら読むことで、子どもへの伝わり方も変わってくる。聞いている人を意識しながら読むことは、ただ字面を追うだけの読み方とは大きく違ってくる。

以下に学生の記述を示す。

・緊張している感じを出さないよう、落ち着いた雰囲気ですらられるように気を付けようと思う。

・自分では全く緊張していなかったのに、友人から「緊張していたね」と言われた。リラックスして読んでるように見せるにはどうすればよいのか、客観的に自分を見るようにしたい。

・後ろに座った子どもにも見やすいようにしたい。

・ゆっくり、大きな声で、丁寧に読むこと。本を持つ手

をぶれないようにすること。集中できる環境をつくること。

・子どもが引き込まれる声の大きさと読む。絵本に集中しやすい環境を整える。(手遊びで子どもたちの気持ちが昂るのは控える、など)

・全員に絵本が見えているか、声が聞こえる場所にいるか。

・練習では子ども相手ではなかったもので、思わず難しい言葉になってしまうことがあった。子どもに適した話し方などに気を付けようと思う。

・子どもが座っている位置を考えて、全員が見える位置で読み聞かせをしたり、絵本を読む前に子どもたちが集中できるように手遊びをしたりすることが大切だと思いました。また子どもは絵を見て内容を理解するので、ページをすぐにめくるのではなく、絵をじっくり見られるようにゆっくりめくることにも気を付けていきたいです。

・ゆっくりと読み、楽しませるようにしたい。

・ゆっくり、はっきり、感情豊かに「楽しい!」「おもしろい!」と思われる本の読み方をする。

・興味を持ってもらえるような読み方をする事です。

・読み手、聞き手、その場にいる人達全員がその絵本の世界に入り込めるように絵本の世界観を大切に、絵本ばかり見て読むのではなく、子どもたちの方へも顔を向ける。

(7) 調査内容8『次はどんな本に挑戦したいですか。(ジャンルでも題名でも構いません)』の結果については、以下であった。

今回とは違った種類の絵本を読みたいと思う学生が多かった。友だちの読み聞かせを聞いて、その絵本の良さに気づいた学生もいた。

以下に学生の記述を示す。

・仕掛け絵本

・少し笑えるような楽しい本

・昔話

- ・食べ物の本
- ・動物の出る絵本
- ・オノマトペの多い絵本

・子どもたちが絵本を聞いた後に友だちとその絵本の話をして、関係を深めてもらえるような絵本。

・次は寝かしつける時の絵本を読みたいです。子どもが眠りにつけるような工夫をした読み方に挑戦したいです。

・友だちも何人か読んでいて気になったのが、昔の語り口調や関西弁などの絵本を読みたいです。

・私は林明子さんの絵本が好きなので、次は林明子さんシリーズを読み聞かせしたいです。

- ・「おまえうまそうだな」
- ・「じごくのそうべい」
- ・「くれよんのくろくん」
- ・「おいしいのぼうけん」
- ・「ないたあかおに」 など

(8) 調査内容9、10『これまで子どもの前で絵本の読み聞かせを行ったことはありますか。(・ある・ない)』『問9で「ある」と答えた方、いつ頃、どのような場所での読み聞かせでしたか』の結果については、以下であった。

・ある 67名 ・ない 73名

この調査内容では、「ある」と答えた中で多かったのは、中学や高校での実習やボランティアで読み聞かせの体験をしたという回答やアルバイト先での体験であった。また、家庭で自分の子どもに対して読み聞かせを行っていたという回答もあった。

家庭での読み聞かせと保育の場での読み聞かせには違いがある。家庭では少ない人数の子どもに対しての読み聞かせであるので、膝の上に乗せたり、横に並んで絵本を見せたりする。保育の現場では、クラス単位での読み聞かせが多くなる。一度に7～8名くらい、また多くなると30名を超えることもある。

太田ら(2021)は、『絵本の読み聞かせは、子ども一人ではできない。読んでくれる人が必要である。聞き手は一人であることも、クラスの友だちみんなであることも

あるが、絵本を通して保育者や他の子どもとのかかわりが生じる。読み聞かせを通じたコミュニケーションにより、人間関係も形成されていくのである。』<sup>9</sup>としている。家庭で子どもに絵本を読んだことがあっても、保育の場で集団に対して絵本を読むことには大きな違いがあるということを理解し、集団に向けての読み聞かせの知識や心構えを修得していくようにしなければならない。

以下に学生の記述を示す。

・高校のインターンシップ。こども園で行った。

・中学生の時。トライやるウィークで幼稚園に行った時。

・アルバイト先の保育園で二人の子どもに読み聞かせをした。

・娘に自宅で毎晩読み聞かせをしている。

・6、4、2歳の子どもがいるので、毎日30弱くらい読んでいる。 など。

(10) 調査内容11『問9で「ある」と答えた方、子どもの反応はどうでしたか』の結果については、以下であった。

①楽しそうだった。

②様々な反応があった。

実際に子どもの前で読んだことのある学生は中学や高校の時の経験であったが、子どもたちが自分の読む絵本に興味を示し、様々な反応してくれたことをよく覚えている。「楽しそうにしていた」と感じることもあれば、単に自分に気を使っていたのではないかと考える学生もいた。「絵本をぐっ見つめていた記憶がある」とも書いているので、気を使ってそのような状況になるとは考えにくい。しかし本人が絵本の読み聞かせに自信がなかったためか、そのように感じてしまっている。

また緊張して余裕がなく、子どもの反応を見ることができなかった学生もいた。場数を踏むことで落ち着いて読めるようになってくる。技術を磨いていくことでも余裕を持った読み聞かせに繋がっていく。

以下に学生の記述を示す。

・絵本の中の登場人物の行動などに反応して楽しそうだった。

・読んでいるときに笑ってくれたり、指をさしたりして



「〇〇だ！」と反応してくれた。

・興味津々で聞いてくれました。

・読み終わった後にいろいろな感想を伝えてくれたり、静かに夢中になってみてくれたりしていた。

・歯医者の本を読んだ。少し怖い本だったので驚いている子がいたり、「ちゃんと歯を磨かないと」と言っている子がいたりした。

・「おおきなかぶ」を読みました。「うんとこしょ、どっこいしょ」と一緒に言ってくれたり、なかなか抜けないかぶに対して「ブルドーザーで抜いたらいいんだよ」というような発言があったりしました。笑顔がたくさん見られたので、嬉しかったことを今でも覚えています。

・集中して聞いていたように見えたが、実習生の私に気を使っただけなのかもしれない。よくわからない。絵本をぐっと見つめていた記憶がある。

・幼稚園では少し長めの絵本だったにもかかわらずみんな静かに聞いてくれていました。しかし子どもたちの様子を見る余裕がなかったので、集中して聞いてくれたかはわかりません。

(11) 調査内容12『絵本の読み聞かせについてもっと教えてほしいことや学んでおきたいことがあれば書いてください』の結果については、以下があがった。

①絵本の読み聞かせにあたり導入の仕方や読み聞かせの終わり方。

②子どもたちを引き込む方法。

③絵本を選ぶポイント。

学生は人前で読み聞かせを行ってみたことで、読み聞かせの手法についてより深く学びたいという気持ちになっている。

また実習などで現場に出た時のことを想定できるようになっている学生もいる。自分で経験してみることで気づけることはたくさんある。学生が上手いかなかったことを失敗と捉えるのではなく、自分を省みて次に繋いでいくことのきっかけに導きたい。

以下に学生の記述を示す。

・集中せずに喋ったり、動いたりする子どもへの指導の方法。

・自分はなんでも体験したいタイプなので、自分でやって学びたいです。

・導入や終わり方についてももう少し学びたいです。

・0～2歳児くらいの子どもに対する導入の仕方を詳しく教えてほしいです。また読み聞かせが終わった後に「もう一回読んで」と言われた時の対処法を教えてください。(後で読もうね、以外にあれば教えてください)

・どのようにしたら、もっと子どもたちを引き込むことができるのか教えていただきたいです。

・絵本を選ぶポイントを知りたいです。

・絵か物語の楽しさ、どちらを取った方が楽しんで聞かしてくれるかが気になる。

#### 4. まとめ

「保育内容・言葉Ⅰ」の授業で行った絵本の読み聞かせ実践についてまとめてきた。初めて読み聞かせを行ったという学生も多くいたことを考えると、実際に人前での読み聞かせを行ってみて初めて気づくことも多々あったと考えられる。その気づきを次に活かすことのできる機会があれば、自分のものとして身につけていく。

しかし現状、授業内での読み聞かせの機会は1回だけである。このため、自分で気づいた改善点を活かせるのは実習内ということになってしまう。また「次はこうしてみたい」と考えても、期間が空いてしまうと忘れてしまうことも出てくる。せっかくの気づきを活かせるようにするためには、授業内でもう一度読み聞かせの機会を作ることである。そうすることで自分なりの反省点を活かし実践に即した読み聞かせの方法や心構えを身につけることができる。また繰り返し行うことで、読むことに対する余裕ができてくる。

絵本をただ読むだけではなく、子どもたちに伝えることも考えながら読むためには、教材研究も必要である。読み方の技術面だけでなく、内容の理解が無ければ子どもには伝わらない。そのようなことに気づき、自分を振り返りながら読むためには、やはり再度読み聞かせの機会を設けることが望ましい。

学生には今後も実践を行う機会を多く設け、様々なことに対応できるような授業内容を考えていきたい。今回の調査内容のひとつ「12. 絵本の読み聞かせについてもっと教えてほしいことや学んでおきたいこと」について、「絵本の読み聞かせにあたり導入の仕方や読み聞かせの終わり方」「子どもたちを引き込む方法」「絵本を選ぶポイント」などの回答があった。今回の絵本読み聞かせの実践を行うことで、学生が子どもの前での読み聞かせを意識することができている。

また読み聞かせの課題の一つとして「手遊びなどの導入をすること」をあげていた。それにより学生は、導入の難しさや「思っていたより上手くいかなかった」という経験をしている。導入の方法やいかにより子どもたちが絵本への興味や関心を持てるようにするのか、また読み終わったあとのまとめをどのようにするべきかなども、詳しく指導する必要があるということがわかった。

今後の「保育内容・言葉Ⅰ」の授業では、絵本読み聞かせの実践に関する方法や基本的な考え方、教材研究の重要性を指導していくと同時に、導入、まとめの方法や重要性の指導も踏まえた授業内容に改善し、取り組んでいきたい。

大元千種・岡本満江・山本直樹・下川涼子・大谷朝・高橋さおり（著者）『保育ニュー・スタンダード 保育内容「言葉」—話し、考え、つながる言葉の力を育てる—』株式会社同文書院 2021 P184

#### ピアスーパバイザーからのコメント

本稿は保育者養成校「保育内容・言葉Ⅰ」の授業において「絵本の読み聞かせ」に着目している。「絵本の読み聞かせ」についての学生へのアンケートの結果と授業における学生の課題の取り組みの様子を照合しながら考察し、今後の授業展開への課題について言及している。保育者養成校の学生の課題への振り返りとして、分野を問わず参考になる知見である。今後はアンケート結果を数値化して分析し、客観的な指標としての考察も望まれる。  
(担当：井本英子)

#### 5. 引用文献・参考文献

1. 伊勢明子, 吉村真理子『保育者にとっての絵本体験の重要性 ～保育者の資質を高める絵本ノートの活用について～』千葉敬愛短期大学紀要, 2017 P449
2. 小川清実『演習 児童文化 保育内容としての実践と展開』(株) 萌文書林 2010 P69
3. 杉山きく子 張替恵子 古賀由紀子 清水千秋 護得久えみ子『TCLブックレットよみきかせのきほん—保育園・幼稚園・学校での実践ガイド』公益財団法人東京子ども図書館 2018 P5
4. 前掲2 P76
5. 代田知子『読み聞かせわくわくハンドブック\*家庭から学校まで\*』株式会社一声社 2001 P40
6. 前掲2 P72
7. 前掲3 P2
8. 児玉ひろ美『よくわかる! 絵本の選び方・読み方 0～5歳子どもを育てる「読み聞かせ」実践ガイド』株式会社小学館 2016 P15
9. 太田光洋・古相正美・野中千都（編著者）川俣沙織・渡邊望・森木朋佳・島田知和・中山智哉・永田麻詠・